東女医大誌　第83巻　臨時増刊号
頁　E1　平成25年1月

巻　頭　言

東京女子医科大学医学部小児科教室
大澤眞木子（オオサワ マ キ コ）

18歳入学時から44年間，約半世紀に亘り，お世話になって育てていただいた東京女子医科大学を定年退職する日が身近になった．主任教授を拝命し，19年近くが経過した．5年目に記念論文集を作成させていただいた．初期臨床研修制度開始といった社会的背景の変化もあり,「医師として，大学人として，当教室で経験し研究した事柄は論文としてまとめ公表する責任がある」と叱咤激励しながらも，私儀の指導力不足により10年，15年の機会は逃してしまった．

医療を求めて医療機関を訪ねられる患者さんの多くはdisease（○○病）ではなく，dis-ease（何となく具合が悪い）である．また，珍しいdiseaseであってもICD10のリストには当てはめられない，病名がつけられない病気・病態も数多く存在する．その時点で何が何処まで明確になったのかを明らかにし，医療的にできることを考察しておくことは非常に重要である．記憶には限界があり，また資料保存の観点からも，また社会に公表することで同様症例の経験者が情報を共有し，研究が発展することもしばしば経験されることからも記録に残すことは大変重要である.「医師は患者さんに育てていただく」を実感としている者として，臨床経験一例一例の貴重さは，身に染みている．今の教室員は在籍年数がそれなりに長くなり，教室を我が家と感じ，愛している人達である．今回は，平澤恭子准教授，伊藤康講師らが中心となって，教室スタッフが分担して教室員に声をかけて細かい指導に尽力することにより記念論文集として提出することができる運びとなった．実際に投稿された論文を見ると，現教室員のみならず，初期臨床研修医，また，教室のOBすなわちかつて当教室に在籍し現在は各方面で活躍している方々も多数寄稿していただいた．誠に有り難いことである．

巻頭言を書く機会を与えられたことを利用して，執筆者各位の尽力，教室のOB諸氏のご厚意に心から感謝申し上げる．と同時に，これらの頑張りにもかかわらず，毎日の激しい切磋琢磨と血のにじむような努力の積み重ねから蓄積された当教室の宝物の重大な部分がまだ残されていることも確認しておきたい．

最後に，多数の原稿を時間的制約の中で，極めて的確に厳密公正に審査し，懇切にご指導くださいました泉二登志子本誌編集担当幹事長を始めとする編集担当幹事の諸先生方に心から感謝申し上げます．